

益田東高等学校

三年生 小籾 咲紀

「ありがとう」：なんと尊い言葉なんでしょうか。体が小刻みに震えている、弱々しく発せられたその人たちから、私は大きなパワーをもらったのです。

私の家には母がいません。両親は私が四歳の時に離婚しました。仕事で忙しかった父の元からも離され、祖父母の手で育てられました。私が寂しくないように、父の代わりにも母の代わりにもなってくれました。しかし、両親のいない寂しさで一人悩んだり、親を慕ったり、他人をうらやましいと思うことは祖父母に対して悪いという、心の葛藤もありました。嫌でも避けて通ることのできないこの現実を受け止めるまでには、ずいぶん長い道がありました。それでも愛情を注いでくれる、そんな二人が大好きで、私はいつの間にか根っからのおじいちゃんっ子、おばあちゃんっ子になっていました。

今、祖父は八十九歳。祖母は八十歳。正直、何があってもおかしくない年齢です。もしもの時が来る前に何としてでも恩を返したい。そのためにはどうしたらいいだろう。今すぐに、何か行動を起こせることはないだろうか？高校生になって私は常にそう考えるようになっていました。ですが、まだ学生で無力な私にはとても難しいことのように思えたのです。

祖母は何事にも深く感謝する人です。朝は無事に目が覚めたことに感謝。夜は無事に一日が終わったことに感謝。そんな祖母を見て育った私には、自然と「ありがとう」という言葉が身につについていました。ある時、祖母にこう言われました。

「さきは、ちゃんとありがとうちゅうて言うけえ偉いねえ。なかなか言われん言葉なんよ。」私はそれを聞いて、はっとしました。「ありがとう」ということが、今私がすぐに出せる恩返しなのではないかということに気がついたのです。以心伝心という言葉があるように、心と心で通じ合うことができればよいのですが、実際はそう簡単にはいきません。言葉にしないと伝わらないこともあります。もし、今伝えなかったら、もう一生伝えられないかもしれない。言える時に言っておかないと後悔するかもしれない。そう思うのです。

今年の三月、学校の授業の一環で職場体験があり、地元の病院で老人介護の体験をしました。そこで出会ったお年寄りの方々は、自分一人では体を動かせない方や、会話すらもできない方がほとんどでした。一緒に暮らしている祖父母とは全く違う状態の方たちばかりで、最初はすごく驚いたと同時に切なくていたたまれない気持ちでいっぱいになりました。とっさに、うちの祖父母はとも元気で頑張っているんだと思うと、頼もしくて嬉しくなりました。たった三日間の職場体験でしたが、学ぶことが多い貴重な時間でした。患者さんに少しでも喜んでいただくたい、どんなふうにも声をかけたら楽しんでもらえるのだろうか、一生懸命考えたり、食事の介護や車いすを押すのも、自分なりに心をこめてさせてもらいました。

そんな中で、ある一人の方から「ありがとう」という言葉を聞いた時は、温かい涙がこみ上げてくるほど嬉しかったのです。なんて尊い言葉なんでしょう。ほとんど動かない体を必死で起こしながら、体中の力を振り絞って「ありがとう：ありがとう」と何度も言ってくれたいました。私の目をじっと見つめながら、食事の時にしよちゅうスプーンを落としたいとは思えない力で、私の手をギュッと握ってくださいました。人の温かいぬくもりを感じました。まっすぐ強く生きなさいという、大きなパワーをいただきました。しっかりと話を聞かなくても体が動かなくても、私はその人から「ありがとう」という言葉の深い意味を教えてくださいました。たったひとこと「ありがとう」そう言われるだけで、力が湧いてくる。今私にできることは、背伸びせず、素直な心をそのまま伝えることだということを確認できた出会いでした。

これって立派な恩返しだと思いますか？そして、まずは一番身近な人にその気持ちを伝えてみませんか？感謝すべき人は私達の周りにはたくさんいると思います。親戚、先生、消しゴムを拾ってくれた友達、スーパールのレジのおばちゃん：世界中の人たち。みんな私達を支えてくれている人達です。私は私に関わったすべての人に「ありがとう」と伝え、感謝の輪を広げ

ていきたいのです。その輪が人から人、世界中に広がっていくことを願いながら。そして、私自身も人から「ありがとう」と言われるような人間になりたいと思います。私の祖父母のように…。